

学会だより

第54回 日本肝臓学会総会

持田 智

(埼玉医科大学消化器内科・肝臓内科)

第54回日本肝臓学会総会は2018年6月14日(木)、15日(金)に西口修平先生(兵庫医科大学内科学肝胆膵科 主任教授)を会長として、大阪国際会議場およびリーガロイヤルNCBで開催された。テーマは「肝臓学の変革に挑む―新天地への船出―」である。

肝臓病の領域では、C型肝炎ウイルス(hepatitis C virus; HCV)に対する直接作用型抗ウイルス薬(direct acting antiviral; DAA)の進歩が目覚ましく、C型慢性肝炎、代償性肝硬変は8～12週でウイルス排除が可能になった。しかし、B型肝炎ウイルス(hepatitis B virus; HBV)に関しては、核酸アナログとペグインターフェロンを併用することで、ウイルスの複製は抑制可能であるが、肝細胞から排除することはできないのが現状である。また、生活習慣の変化に伴って、アルコールないし肥満、糖尿病に起因する脂肪性肝疾患が急増している。このため肝硬変、肝臓の成因と臨床像は大きく変化している。その一方で、肝臓に対しては新たな分子標的薬が次々と登場し、来年度には免疫チェックポイント阻害薬も臨床応用される見通しである。西口修平会長は、まさに大きな変革も迎えた肝臓学を整理するために、5シンポジウム、6パネルディスカッションおよび12ワークショップと、計23の主題演題を設定し、計15の会場で活発な討論が行われた。また、4人の海外からの講師が、HBV、HCV、肝臓および肝線維化に関する招待講演を行ったが、いずれも同一内容の主題演題の基調講演として時間が設定されていた。このため海外の講師も討論に参加して、聴衆は国内外の実態も踏まえて、「新天地への船出」に備えて何をなすべきか、深い理解が得られたのではないかと感じた。

今回の総会では、従来にない新たな企画が、大阪人の西口修平会長のお言葉では「てんこ盛り」に用意されていた。まず、目を引いたのは「肝臓学の将来:理事長鼎談」である。小池和彦理事長の司会で、歴代理事長である沖田 極先生、林 紀夫先生、井廻道夫先生から、現役の肝

臓病専門医、研究者に対して、助言を発していただいた。われわれ役員、評議員の世代には、苦言とを感じるようなご意見も、若手の会員にとっては、むしろ新鮮に感じられたのではないかと推察する。一方、現在、学会の舵取り役である役員からは、茶山一彰先生、滝川 一先生、工藤正俊先生、高山忠利先生の4人の理事が選ばれて、それぞれの専門領域に関して、「肝臓研究の過去から未来への潮流」と題する講演を行った。また、日本肝臓学会は日本糖尿病学会と共催で、「肝と糖尿病・代謝研究会」を毎年開催しており、同学会とは連携して脂肪性肝疾患に取り組んでいるが、同学会の理事長である門脇 孝先生には、「糖尿病学会から肝臓学会への提言」をいただいた。さらに、新企画としては「Meet the Expert」が行われ、8名の評議員がご自分の研究に関して講義した。事前予約で集まった少人数の若手会員が対象で、参加者が斬新な研究を推進する端緒を得られたことを期待している。

また、例年の企画として、自己免疫性肝疾患を主題とした「JSH-EASL Joint Session」、ガイドラインを検証する「日本肝臓学会ガイドラインup to date」、男女共同参画委員会の主催する「未来の肝臓学を支える輝く若手のためのキャリアアップ講座」が開催された。とくに、男女共同参画委員会の企画には若手の男性会員も多数参加し、盛況であったことが注目された。さらにポスターシンポジウムとして、「肝硬変の成因別実態」が第50回総会以来4年ぶりに開催されている。これらに加えて一般演題も口演、ポスターで多数発表され、まさに「てんこ盛り」の総会であった。一つ難を言えば、平成30年度日本肝臓学会前期教育講演会が15日(金)に同時開催され、また、興味ある主題が同時進行していることで、参加者が「てんこ盛り」に十分ついて行けなかったことが挙げられる。課題が多様化する今後は、総会を3日間で開催することも、考慮する必要があるかもしれない。